

教育改善プロジェクト

英語科目再履修登録方法の改善および 新カリキュラムにおける再履修について

山岸倫子, 水野真理子,
木村裕三, 竹腰佳誉子, 藤川勝也, 小田夕香理

本報告では、教養英語科目における複雑な再履修ルールを再考するに至った過程と、2021年度（令和3年度）におけるルールの変更内容を記す。また、再履修を希望する学生を、自律的かつ正確に再履修科目を登録できるようにすることで、教養教育支援室の負担を軽減できるよう、教養教育支援室の協力のもと作成した再履修科目登録におけるフローチャートについて紹介する。

1. はじめに

富山大学における教養英語科目のカリキュラムは、五福キャンパス群（五福文系、五福理系）、杉谷キャンパス群（医学部医学科、医学部看護学科、薬学部）、高岡キャンパス群（芸術文化学部）の三つのキャンパスグループに分かれている。これは、3キャンパス統合前に各キャンパスで実施されていた英語教育の形をなるべく尊重することを重要視してきたためでもあるが、それらの英語教育が、各キャンパスが長年培ってきたノウハウに基づく、学生や各キャンパスの志向を最大限に反映したカリキュラムとなっているからでもある。一方で、それぞれのキャンパスグループにおいて規模や志向の違いが存在することから、カリキュラムの内容に一定の差異が存在してきた。そしてそれは、再履修ルールの複雑さ、ひいては再履修登録申請の受付窓口となる教養教育支援室への負荷に繋がり（教養英語科目の再履修学生数は毎年多く、例えば2020年度の延べ人数は約473名であった）、結果として、再履修ルールを逸脱した履修登録が発生するなどの問題も起こっていた。本稿は、その状況を改善すべく、外国語部会英語分科会教養英語科目運営WG（以降、教養英語科目運営WG）と教養教育支援室が連携した試みについて記す。

2. 再履修ルールの複雑さと問題点

2-1. これまでの再履修ルールとその背景

上記の通り、本学の教養英語科目は、3 キャンパスそれぞれの志向に合わせた英語教育を展開してきたため、再履修ルールが複雑化していた。たとえば、令和2年度前期の再履修ルール（図1）では、五福キャンパスの学生には、英語リテラシー・英語コミュニケーションの2カテゴリーにおいて、「履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない」というルールが示されていた。つまり、単位が取得できなかったクラスであったとしても、そこでの再履修は許可されず、また、表記された以外のルールとして、英語リテラシーと英語コミュニケーションの科目の境なく、同一教員のクラスを履修することはできない、というものがあつた。一方、杉谷キャンパスの学生には、英語リテラシー（前後期）・英語コミュニケーション（前後期）の4科目において「履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない」というルールが示され（五福のルール同様、単位が取得できなかったクラスでの再履修は許可しないが、シラバス内容が異なるという条件下であれば、同一教員のクラスの履修は認めていた）、高岡キャンパスの学生には、英語リテラシー・英語コミュニケーションともに、I-Eを落とした場合はI-E（Eは芸文クラス）で再履修し、II-Eを落とした場合はI-A（Aは五福クラス）で読み替え再履修するが、ある特定の教員のクラスは不可、というようなルールが示されていた。これらのルールの背景には、いずれも理由が存在していた。例えば五福キャンパスにおいては、英語科目は既習外国語を扱うという性質上、同じ教材に何度もチャレンジして単位を取得するよりも、多様な教員や学習方法に触れたうえで4単位を取得することが望ましいと考えられていた。それに加え、前後期、同シラバスで授業を展開する教員が多いことから、学生が読み替え再履修をした場合、同一内容で前後期2科目分の単位を取得してしまう可能性が出てくるというリスクを回避する必要性があつた。杉谷キャンパスでは、五福キャンパスほどではないものの（杉谷は、シラバスが異なれば、履修したことのある教員が開講するクラスでも再履修可としていた）、多様な英語に触れて単位を取得させることを重要視していたことと、五福キャンパス同様、読み替え再履修が孕む危険性回避の必要性があつた。一方、高岡キャンパスは、同一内容で再履修させることを基本路線としていた点が他の2キャンパスとは異なっていた。しかし、開講クラス数が12クラスと少なく、担当教員も限られていたことから、読み替え再履修時に、同一内容で2単位を取得してしまう危険性が、他の2キャンパスよりも更に高かったため、読み替え再履修の場合には、開講クラス数の多い五福クラス（芸文クラスも担当している教員のクラスを除く）で再履修するというルールになっていた。

2-2. 問題点の判明、対応策、及びそれらからの学び

2-2-1. 問題点とルールの改正

このような背景により、上述のルールが学生に提示されていたわけであるが、それらは文書のみのご案内であつた。その文書は、毎学期の科目登録前に、教養英語科目運営WGのメンバーで確認・改定作業を行っていたが、WGのメンバーですら、毎回各キャンパスのルールを思い出し、内容や文言に齟齬を来さないように文書を調整することに苦戦していた。今振り返ってみると、そのように複雑なルールを、文書による通知のみで学生が理解して登録することには困難が伴うのは明らかであるが、この再履修ルールの策定作業が開始した2018年度（平成30年度）以来、再履修ルールの通知文書を

令和2年度前学期外国語科目（英語）の再履修について

令和元年度に開講された「英語」科目の再履修については、令和2年度前学期に下表で指定する授業科目の履修により再履修することができます。

また、英検、TOEIC、TOEFL等、大学以外の教育施設等における学修の認定により単位を修得することもできます。（2019年度教養教育ガイド45ページ参照）

なお、英語リテラシーⅡ、英語コミュニケーションⅡの再履修については、後学期に当該科目の履修により再履修することもできます。

※「同一内容のクラス」とは、シラバスの内容が同じ場合を指します。

※「履修済みのクラス」とは、修得済み、未修得にかかわらず、履修したことのあるクラスを指します。

対象学部：人文学部、人間発達科学部、経済学部、理学部、工学部、都市デザイン学部

科目名	再履修科目	注意事項
英語リテラシーⅠ-A	英語リテラシーⅠ-A	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。
英語リテラシーⅡ-A	英語リテラシーⅠ-A (読替科目)	
英語コミュニケーションⅠ-A	英語コミュニケーションⅠ-A	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。
英語コミュニケーションⅡ-A	英語コミュニケーションⅠ-A (読替科目)	

対象学部：医学部医学科

科目名	再履修科目	注意事項
英語リテラシーⅠ-B	英語リテラシーⅠ-B 英語リテラシーⅠ-C(読替科目) 英語リテラシーⅠ-D(読替科目)	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看対象のクラスから選択する)
英語リテラシーⅡ-B	英語リテラシーⅠ-B(読替科目) 英語リテラシーⅠ-C(読替科目) 英語リテラシーⅠ-D(読替科目)	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看対象のクラスから選択する)
英語コミュニケーションⅠ-B	英語コミュニケーションⅠ-B 英語コミュニケーションⅠ-C(読替科目) 英語コミュニケーションⅠ-D(読替科目)	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看対象のクラスから選択する)
英語コミュニケーションⅡ-B	英語コミュニケーションⅠ-B(読替科目) 英語コミュニケーションⅠ-C(読替科目) 英語コミュニケーションⅠ-D(読替科目)	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看対象のクラスから選択する)

図1 令和2年度前期の再履修ルール

対象学部:薬学部

科目名	再履修科目	注意事項
英語リテラシー I - C	英語リテラシー I - B (読替科目) 英語リテラシー I - C 英語リテラシー I - D (読替科目)	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看護対象のクラスから選択する)
英語リテラシー II - C	英語リテラシー I - B (読替科目) 英語リテラシー I - C (読替科目) 英語リテラシー I - D (読替科目)	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看護対象のクラスから選択する)
英語コミュニケーション I - C	英語コミュニケーション I - B (読替科目) 英語コミュニケーション I - C 英語コミュニケーション I - D (読替科目)	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看護対象のクラスから選択する)
英語コミュニケーション II - C	英語コミュニケーション I - B (読替科目) 英語コミュニケーション I - C (読替科目) 英語コミュニケーション I - D (読替科目)	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看護対象のクラスから選択する)

対象学部:医学部看護学科

科目名	再履修科目	注意事項
英語リテラシー I - D	英語リテラシー I - B (読替科目) 英語リテラシー I - C (読替科目) 英語リテラシー I - D	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看護対象のクラスから選択する)
英語リテラシー II - D	英語リテラシー I - B (読替科目) 英語リテラシー I - C (読替科目) 英語リテラシー I - D (読替科目)	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看護対象のクラスから選択する)
英語コミュニケーション I - D	英語コミュニケーション I - B (読替科目) 英語コミュニケーション I - C (読替科目) 英語コミュニケーション I - D	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看護対象のクラスから選択する)
英語コミュニケーション II - D	英語コミュニケーション I - B (読替科目) 英語コミュニケーション I - C (読替科目) 英語コミュニケーション I - D (読替科目)	履修済みのクラスと同一内容のクラスで再履修することはできない。(再履修クラスは医・薬・看護対象のクラスから選択する)

対象学部:芸術文化学部

科目名	再履修科目	注意事項
英語リテラシー I - E	英語リテラシー I - E	
英語リテラシー II - E	英語リテラシー I - A (読替科目)	※芸文のクラスをご担当される、グレイ先生、グリーン先生のクラスでは再履修することはできません。
英語コミュニケーション I - E	英語コミュニケーション I - E	
英語コミュニケーション II - E	英語コミュニケーション I - A (読替科目)	外国人教員が担当する「英語コミュニケーション I - A」のクラスで再履修することができる。※芸文のクラスをご担当される、グレイ先生、グリーン先生のクラスでは再履修することはできません。

図1 令和2年度前期の再履修ルール (続き)

作成した後の具体的な手続きについては、教養教育支援室と学生に任せる形となっていた。時折、ルールを逸脱した学生の登録が発生したこともあったが（例えば、五福クラスにおいて、同一教員・同一内容のクラスに、再履修学生が登録されている）、個々に対応することで解決し、抜本的な解決方法を探ることはしてこなかった。

ところが、2020年度（令和2年度）末になり、職員の異動に伴い、これまで本業務を熟知していた教養教育支援室員を欠いてしまうことから、齋藤室員より、本ルールを簡素化することができないかという打診があった。新カリキュラム導入まであと1年のところであったため、当初は現状維持をお願いできないかとも考えたが、実際に再履修登録申請の受付を担当する現場を見てきた齋藤室員とのやり取りを通して、教養英語科目の再履修ルールが複雑であり、通知内容も分かりにくいことが、学生の再履修クラス選択における主体性の欠如を引き起こしており、またそれが、教養教育支援室にとっての大きな負荷に繋がっているということが分かってきた。また、齋藤室員より「再履修を希望するクラスが、以前履修したクラスと『同一内容』であるかどうか判断することは、教養教育支援室も学生も不可能」、「『同一内容』のクラスが不可となると、複数回単位を落としている学生の中に、履修できるクラスが一つもない学生が出てくる」、「単位を落とした同じ教員の科目を再履修することは本来、教育上及び履修規則上の問題はない（現に、専門科目ではそのように対応している）」という意見も寄せられたことから、3月末に急遽、教養英語科目運営WGでメール会議を行い、最終的に、五福と杉谷の「履修済みのクラスと同一内容のクラスでの再履修は不可」というルールを緩め、「昨年度（2020年度）に履修した教員の授業は不可」とするという結論に至った（図2）。これは、高学年の学生の再履修登録を容易にすることと、専門科目とは異なる、既習外国語科目の特性の両方を考慮した折衷案ともいえるべきものであった。

2-2-2. 再履修申請手続きをサポートするフローチャートの作成と効果、及び本プロジェクトからの学び

上記の通り、五福と杉谷における再履修ルールは、「履修済みのクラスと同一内容のクラス」にかかわる部分を緩めることとなったが、やはり文書だけの案内では分かりづらく、履修クラス選択における学生の主体性欠如と、教養教育支援室への負担という問題は残ることとなった。そこで、その部分をサポートするために、上記文書をわかりやすくフローチャート化したものを、各キャンパス分作成することとなった。本フローチャート作成時に心掛けたのは、各キャンパスの学生が、ステップに沿って作業を進める中で、これまでの履修履歴を振り返り、主体的に授業を選択することができるようにするということであった。一方で、各時間帯で開講されているクラスと教員名を一覧表にすることにより、学生が選択できる時間帯のクラスと教員を容易に確認できるようにした。また、ステップごとに再履修願へ情報を記入させることにより、ルール逸脱の有無を確認する教養教育支援室の作業を円滑化することも目指した（図3）。本フローチャート作成進捗状況は、随時、教養英語科目運営WGと齋藤室員の間で共有され、フローチャートの内容に沿った形で、適宜、齋藤室員により、再履修願の書式修正の作業もなされた。フローチャートと再履修願の書式は、登録期間直前の4月1日に完成

令和3年度前学期 英語の再履修について

令和3年度前学期の「英語」科目の再履修について、原則、次の方法により修得してください。

① 前学期に再履修

人文学部, 人間発達科学部, 経済学部, 理学部, 工学部, 都市デザイン学部

科目名	再履修科目名	注意事項
英語リテラシーⅠ-A 英語リテラシーⅡ-A	英語リテラシーⅠ-A	①単位修得済みの教員の授業は不可。
英語コミュニケーションⅠ-A 英語コミュニケーションⅡ-A	英語コミュニケーションⅠ-A	②昨年度(2020年度)に履修した教員の授業は不可。 (単位修得/未修得は問わない。)

医学部, 薬学部

科目名	再履修科目名	注意事項
医学部 英語リテラシーⅠ-B 英語リテラシーⅡ-B	英語リテラシーⅠ-B 英語リテラシーⅠ-C 英語リテラシーⅠ-D	①単位修得済みの教員の授業は不可。 ②昨年度(2020年度)に履修した教員の授業は不可。 (単位修得/未修得は問わない。)
薬学部 英語リテラシーⅠ-C 英語リテラシーⅡ-C		
看護学部 英語リテラシーⅠ-D 英語リテラシーⅡ-D		
医学部 英語コミュニケーションⅠ-B 英語コミュニケーションⅡ-B	英語コミュニケーションⅠ-B 英語コミュニケーションⅠ-C 英語コミュニケーションⅠ-D	①単位修得済みの教員の授業は不可。 ②昨年度(2020年度)に履修した教員の授業は不可。 (単位修得/未修得は問わない。)
薬学部 英語コミュニケーションⅠ-C 英語コミュニケーションⅡ-C		
看護学部 英語コミュニケーションⅠ-D 英語コミュニケーションⅡ-D		

芸術文化学部

科目名	再履修科目名	注意事項
英語リテラシーⅠ-E	英語リテラシーⅠ-E	なし
英語コミュニケーションⅠ-E	英語コミュニケーションⅠ-E	なし
英語リテラシーⅡ-E	英語リテラシーⅠ-A	①グレイ先生, グリーン先生の授業は不可。 ②単位修得済みの教員の授業は不可。 ③昨年度(2020年度)に履修済みの教員の授業は不可。 (単位修得/未修得は問わない。) ④英語コミュニケーションⅡ-Eの再履修については、 日本人教員の授業も不可。
英語コミュニケーションⅡ-E	英語コミュニケーションⅠ-A	

② 単位認定

英検, TOEIC, TOEFL 等の検定試験の成績により単位認定を申請できます。(2020年度教養教育ガイド51ページ参照)

③ 後学期に履修

英語リテラシーⅡ, コミュニケーションⅡについては、後学期に再履修することもできます。

図2 令和3年度前期の再履修ルール

五福キャンパス版

教養英語再履修クラス申請手続きの流れ

富山大学外国語部会英語分科会

はじめに

五福クラスの学生が再履修をする場合、以下のルールが適用されます。

ルール1: 単位取得済みの教員が担当するクラスでの再履修は不可（教養英語科目で取得する4単位は、すべて異なる教員が担当したクラスでなければならない。）

ルール2: 原則、昨年度履修したクラスを担当していた教員のクラスでの再履修は不可（昨年度、履修をしていけれど、単位が取得できなかったクラスの教員のクラスは、今年度は再履修できません。つまり、成績表の2020年度のところに名前がある教員のクラスは履修できません。）

ヘルシステム上での成績の見え方例

11	教養教育科目	外国語系	英語リテラシーⅠ-A	富山 花子	2020	前期	D	不可	否	
12	教養教育科目	外国語系	英語リテラシーⅡ-A	John Smith	1.0	2020	後期	B	良	合
13	教養教育科目	外国語系	英語コミュニケーションⅠ-A	北陸 太郎	1.0	2020	前期	70	良	合
14	教養教育科目	外国語系	英語コミュニケーションⅡ-A	Jane Doe	1.0	2020	後期	A	優	合
15	教養教育科目	外国語系	中国語基礎Ⅰ	○○ ○○	1.0	2020	前期	76	良	合
16	教養教育科目	外国語系	中国語基礎Ⅱ	●● ●●	1.0	2020	後期	C	可	合
					外国語系計					5.0

ルール2によって、ここに記載のある先生のクラスでは再履修不可（単位は未取得だが、昨年度である2020年度にこの先生のクラスを履修しているため）

ルール1によって、ここに記載のある先生のクラスでは再履修不可（これらの先生のクラスで単位取得済みのため）

五福キャンパス版

教養英語再履修クラス申請手続きの流れ

STEP 1

成績表を見て、「② 単位取得済みの科目」に、これまでに単位が取得できている科目と担当教員の名前を記入しましょう

11	教養教育科目	外国語系	英語リテラシーⅠ-A	富山 花子	1.0	2020	後期	B	良	合
12	教養教育科目	外国語系	英語リテラシーⅡ-A	John Smith	1.0	2020	後期	B	良	合
13	教養教育科目	外国語系	英語コミュニケーションⅠ-A	北陸 太郎	1.0	2020	前期	70	良	合
14	教養教育科目	外国語系	英語コミュニケーションⅡ-A	Jane Doe	1.0	2020	後期	A	優	合
15	教養教育科目	外国語系	中国語基礎Ⅰ	○○ ○○	1.0	2020	前期	76	良	合
16	教養教育科目	外国語系	中国語基礎Ⅱ	●● ●●	1.0	2020	後期	C	可	合
					外国語系計					5.0

② 単位取得済みの科目
単位取得済みの科目に「科目名、担当教員名」を記入してください。

科目名	担当教員名
英語リテラシーⅠ-A	<input type="checkbox"/>
英語リテラシーⅡ-A	<input type="checkbox"/>
英語コミュニケーションⅠ-A	<input type="checkbox"/>
英語コミュニケーションⅡ-A	<input type="checkbox"/>

※記入した科目の履修率は「3」に記入します。

STEP 2

成績表を見て、「③ 昨年度に単位を落とした科目」に、昨年度（2020年度）、履修したけれども単位が取得できなかった科目と担当教員の名前を記入しましょう

年度をしっかりとチェック！昨年度（2020年度）のものだけをピックアップしよう！

11	教養教育科目	外国語系	英語リテラシーⅠ-A	富山 花子	2020	前期	D	不可	否	
12	教養教育科目	外国語系	英語リテラシーⅡ-A	John Smith	1.0	2020	後期	B	良	合
13	教養教育科目	外国語系	英語コミュニケーションⅠ-A	北陸 太郎	1.0	2020	前期	70	良	合
14	教養教育科目	外国語系	英語コミュニケーションⅡ-A	Jane Doe	1.0	2020	後期	A	優	合
15	教養教育科目	外国語系	中国語基礎Ⅰ	○○ ○○	1.0	2020	前期	76	良	合
16	教養教育科目	外国語系	中国語基礎Ⅱ	●● ●●	1.0	2020	後期	C	可	合
					外国語系計					5.0

③ 昨年度に単位を落とした科目
昨年度（2020年度）に履修し、「単位を落とす」科目の履修登録申請書を「3」に記入してください。

科目名	履修登録申請書
英語リテラシーⅠ-A	<input type="checkbox"/>
英語リテラシーⅡ-A	<input type="checkbox"/>
英語コミュニケーションⅠ-A	<input type="checkbox"/>
英語コミュニケーションⅡ-A	<input type="checkbox"/>

※記入した科目の履修率は「3」に記入します。

図3 再履修登録申請手続きをサポートするためのフローチャート（五福キャンパスの例）

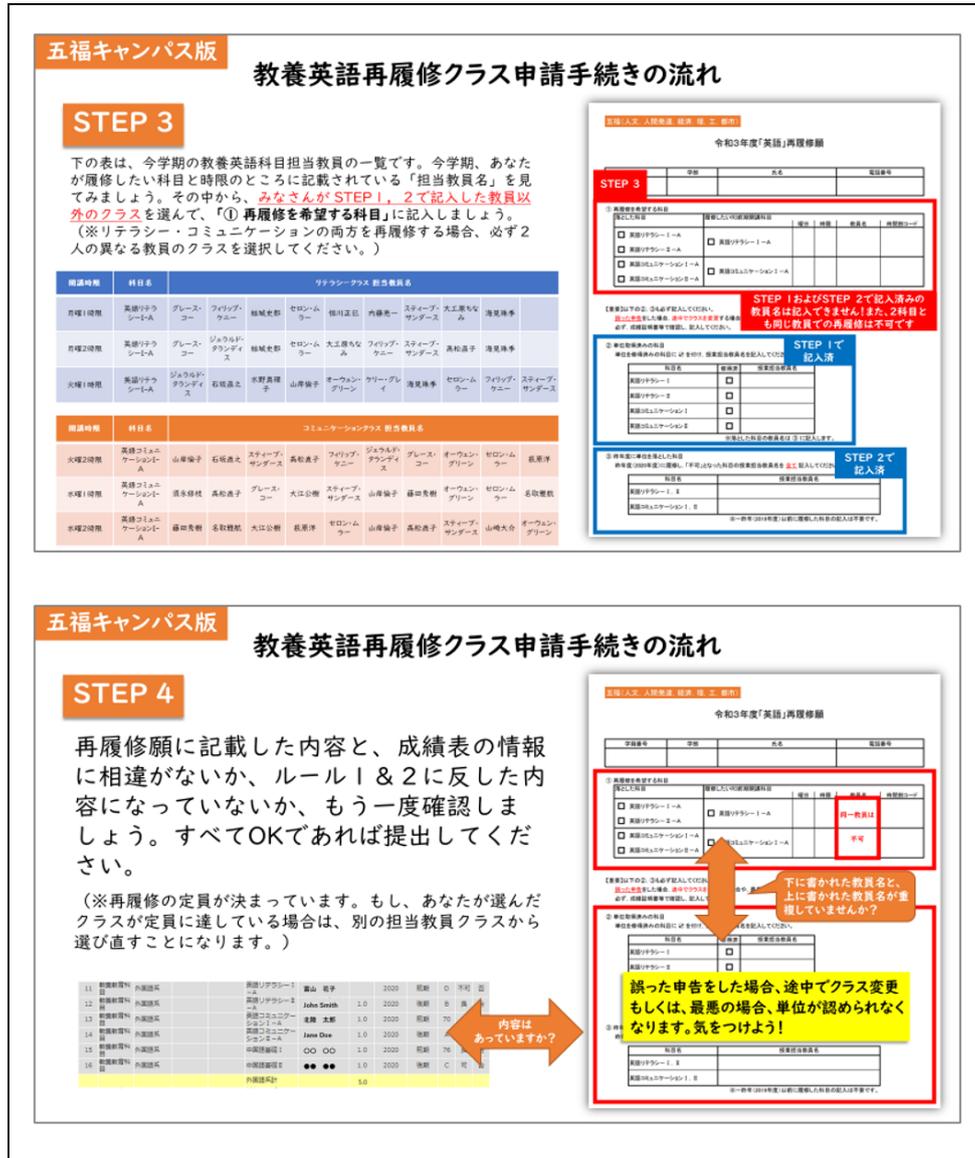


図3 再履修登録申請手続きをサポートするためのフローチャート（五福キャンパスの例）（続き）

し、無事活用された。（後期の登録期間前にも同様の作業を行い、後期の再履修登録申請においても、本フローチャートが活用された。後期において一点だけ変更があったのは、五福及び杉谷の科目群の再履修申請において、2020年度〔令和2年度〕に履修した教員に加え、2021年度〔令和3年度〕前期に履修した教員も不可とした。これは、既習外国語学習の特性を考慮した措置である。）

本フローチャートの効果であるが、齋藤室員より、次のような情報が寄せられた。例年、学生一人に対する窓口対応時間が平均5分かかっていたところ、本フローチャート導入により、その時間が2分程度に削減された。2021年度（令和3年度）の再履修学生の延べ人数は430名であったことから、窓口対応時間は21.5時間削減され、人件費は43,000円削減された。また、本フローチャートを使用す

れば、支援室に着任したばかりの室員や非常勤職員でも窓口対応できるようになったことは、上記の時間数には表れていない大きな効果であるとのことであった。これらのことから、本フローチャートは、その目的を達成したといえるだろう。

本プロジェクトを進める中で、教養英語カリキュラムの円滑な運営においては、教員と教養教育支援室間の意見交換・連携が不可欠であることを改めて認識した。令和4年度からは新カリキュラムが導入される予定であり、そちらについても、現在様々にご協力をいただいているが、実際に運用が始まった後も、それぞれの持ち場の状況について緊密に情報交換を行うことが、新カリキュラム成功の鍵のひとつになると考えている。

3. 新カリキュラムにおける再履修の在り方

本プロジェクトを通して、改めて再履修の制度の在り方や現行の制度の問題点に直面することとなったが、新カリキュラムにおいても、再履修は様々な問題を孕むことが予想される。例えば、新カリキュラムでは習熟度別クラス編成が導入される予定であるが、再履修の場合、どのレベルで再履修をさせるのか、といった問題や、読み替え再履修をどのように認めるのか（特に習熟度別クラス編成のESP Iと、選択制のESP II間において）といった問題が考えられる。また、現行のカリキュラムでも各キャンパスにおいて考え方の方向性が異なる、既習外国語における再履修の在り方も、議論のポイントとして残っていくだろう。新カリキュラムにおける再履修の在り方については、現在、外国語部会英語分科会教養英語カリキュラム検討WG内で検討中である。また追って報告を行いたい。

山岸倫子

富山大学教養教育院

水野真理子

富山大学教養教育院

木村裕三

富山大学医学部

竹腰佳誉子

富山大学人間発達科学部

藤川勝也

富山大学人文学部

小田夕香理

富山大学芸術文化学部